読書界　２０２１年度第２号

藤島高校図書館　2021.10.29

11／9まで読書週間です！

【先生方のおすすめ本特集】　図書委員が先生方にインタビューしました
以下の４冊とも本校図書館で貸出可能です

杠広治郎先生　――　三浦しをん　『風が強く吹いている』

この作品は、長距離未経験者を含めた個性豊かな１０人が箱根駅伝を目指して突き進んでいく青春小説です。杠先生によると、たすきを繋いでいくうちに１０人の絆が深まっていくところや、個人に合わせた練習メニューの様子が見どころだそうです。また、「速くではなく強く」をはじめとした印象的な台詞もこの本の魅力だそうです。読み終わったあとに思わず走り出したくなるような一冊です。ぜひ読んでみてください。

前田高宏先生　――　辻村深月　『サクラ咲く』

３つの短編の物語です。先生は特に３つ目、「世界で一番美しい宝物」がおすすめだそうです。この物語では映画同好会所属の高校生たちが主演を先輩に頼みますが断られてしまいます。しかし「あること」によってその先輩に出演してもらうことになります。

この本はみなさんと同じ高校生たちが主人公の青春小説です。自分自身の経験と比べてみてもおもしろいので、ぜひ読んでみてください。

安田楽先生　――　相沢沙呼「medium 霊媒探偵城塚翡翠」

この本は、死者の降霊ができる探偵の城塚翡翠と推理作家の香月史郎のコンビが連続殺人鬼に挑む連続短編ミステリー。章ごとに完結する事件なので、ものすごいペースで読めます。『すべてが伏線。』というキャッチコピーの意味がわかる最終章に、ものすごい大どんでん返しが待っていて驚愕の一言しかないです。最終章は深夜の眠気が吹き飛ぶくらい、思わず、「え・・・？」と、独り言を言うレベルです。続編の「invert」も気になります！　普段あまり小説を読まない人も、すぐに読み終わってしまうので、ぜひ読んでみてください。

島田直子先生　――　重松清　『青い鳥』

８つの短編集からなるこの小説には、どの話にも、吃音症のためタ行とカ行の発音がうまくできない村内先生が登場します。中学校の非常勤講師である村内先生の担当教科は国語。うまく話せない村内先生は、思い悩む多感で成長途中の子ども達にそっと寄り添ってくれます。教室で言葉がわたし、先生にナイフを向けてしまった僕。。。何がせいかいでか不正解かはわからないけど、「大切なこと」をぶれずに伝え、「間に合ってよかった」とほほ笑む村内先生に、心が温かくなります。本当に大切なこととは一体何か、教えてくれる本です。ぜひ読んでみてください。

【１学期アサドクを振り返る特集】
１年生全図書委員が１学期のアサドクから、印象に残った文章を選びました

第１回　外山滋比古「思考の整理学」

○自分も優秀ではないが、完全なるグライダー人間だと思いました。自ら飛行機能力を使おうとしない、なんならその能力があるように感じません。今の学生時代はグライダー能力も重要だと思うけど、将来絶対に飛行機能力の方が必要になる気がするので、他人の言われたことだけではなく、自分から新しいことにもっと挑戦していきたいです。

第３回　俵万智「「長屋」のこと」

旧部室長屋（変人の自治区？）

○俵万智さんの体験を読んで、部活での無駄な時間が今の彼女の一部になっているように感じた。高校時代の何でもないような時間は、時が経つととても大事な思い出になるんだなと感じた。私も限られた時間を疎かにしないように過ごしたい。

○卒業生の俵万智さんも私たちと同じような高校生活を送っていて、藤島のイメージなども私が想像していたものと似ていてとても話に納得したり共感したりすることができました。

○ただ喋っている「無駄」と呼ばれる時間が大切な思い出になったり、チームワークを作っていたりしたと考えると無意味なわけではないのだと思いました。無駄だと思ってしまうことも投げ出さずやろうと思えました。

第５回　芥川龍之介「蜜柑」

○私も主人公と同じで途中までは娘のことを田舎者で無知で、あまり良くない印象を抱いていました。しかし最後の娘の健気な行動と鮮やかなみかんの描写に、田舎から出て行き卑俗な現実を純粋に生きていく娘を応援したくなりました。

○今回の小説では、主人公の細かい心情の変化と、周りの風景の描写が書かれていて、主人　公がどんなものを見ているのか想像することができ、読んでいて楽しく夢中になりました。　前半は主人公の少女に対する嫌悪感などが現れていて、少し嫌な雰囲気だったのですが、　少女が蜜柑を投げた瞬間、物語の雰囲気が明るく色づいたようで、引き込まれました。芥　川龍之介さんの作品では、ほかに授業で羅生門を読みました。今回の蜜柑といい、羅生門といい、芥川さんの　作品は、人の心情が細かく書かれていて引き込まれやすく、また、人の負の面も書いているので他の作家と違　った雰囲気を味わえていいと思いました。ほかの文豪の作品も、芥川さんの作品も読んでみたいと思います。

○汽車の中の短い時間の中で、主人公の心情の変化が車窓から見える景色のようにうつり変わっていくところがいいと思った。蜜柑の鮮やかさが見えた。

○奉公先へ赴く途中の小娘が見送りに来てくれた弟のために、頑張って電車の窓を開けて蜜柑を投げるところが兄弟愛を感じられて印象的でした。そしてこんな兄弟に憧れました。わたしは弟と喧嘩してばかりだけど、物語の小娘のようにどんなときでも弟思いの姉になろうと思います。

第６回　安岡章太郎「サアカスの馬」

○何をしても駄目な主人公が、あるサーカス団の無能そうな馬でも勇ましい姿があり、それに心打たれているのに感動した。何でもネガティブに考えずに自分の可能性に気付き、希望を持っていくことの大切さを知った。

第７回　星新一「おーい　でてこーい」

○読んでいて、とても不思議な感覚だった。最初の方はなんの話かよくわからなかったが、最後の段落を読んで、穴に入れたものが落ちてくるかもしれないと思うと、少しゾッとした。勝手にいらないものを捨てると、どこかに影響しているんだと思った。

○自分たちがしたことはいずれかえってくるという教訓や、処理できないゴミを抱える現代の問題が風刺されていて興味深い話だった。

○大きな穴があるおかげで、都会の町や海は発展していき、汚れやゴミなどをきれいに洗い流しているように見えたが、実際は将来への大きな負担となることを、最後の部分で示すが、作業員は全く気づいていないことが、少し昔の(バブル期)の日本を暗示しているようで面白かったです。

○初めと終わり方は不思議なもので、理解するのが難しかったけど、途中は、現代の核のゴミ問題のようで、訴えかけられるように感じました。

○人間は生産することには熱心だけど、いらなくなったものや、あると不都合なものには適切な対応をしていないんだなと思いました。そして、作業員の頭に足が降ってきたように穴に捨てられたものがこれから降ってくるかもしれないので、無責任に片付けようとした物事はいつか自分に戻ってきてしまうと思いました。

○もっと大きな世界が下にあったのではないかと思いました。内容がいつも読んでいる本とは全然違って、とても楽しめました。

○この話が今の環境と似ていて知らない間に自分たちもこの環境を作っていることに気がつきました。この話の最後からわかるように環境の悪化が次の世代にも気づかれずに進んでいくことは怖いとおもいました。

第８回　三木卓「介添人」

○貧弱な主人公とＱとの今の関係性が、過去の人であるＱの姉とＱ、未来の人であるＧとＱ、それぞれとの間の関係性と似ていることからＱの性格がわかるので、面白いと思いました。

○短い話の中で主人公が興味を持ったり意外に思ったりなんだか残念に思ったりコロコロと感情が変わって小説らしいと思うのに本当の人間の感情の様で、不思議で引き込まれました。